

大陸（中支）

歩兵第六十五連隊

湘桂作戦

福島県 厚美 正

福島県安積郡富久山町大字八小田字西永年十六とい
う所が当時の本籍地、大正九年十二月八日生まれです
から、大東亜戦開戦と同月日でした。農家の次男で、
昭和十六年徴集、郡山市公会堂で兵隊検査を受け、第
二乙種から第一乙種に編入されました。それまでは郡
山市の魚商の番頭をしていて、昭和十七年一月十日、
仙台の輜重兵隊に教育召集を受けました。

一カ月ほど、馬の扱いなどの教育を受け召集解除。

その後徴用令がきて、東京蒲田の日本内燃機株式会社
の工場で、ミールリング工として、エンヂンのシリンド
ーを作っていました。

八月十日に再度召集令状を受け、会津若松の東部第
二十四部隊へ入隊、一カ月教育を受けましたが、衛生
隊、輜重要員として補充されました。七月二十七日貨
物船で宇品港を出帆しました。だれでも体験した船中
は蚕棚、そこを通るのには腰をかかめなければなりま
せん。

夏のこととて船内は蒸し暑く、他の人は赤田虫とい
う皮膚病になる。かゆいのでかくと丸形に広がる。上
陸して十日くらいで他の人は治療したが、今度は私だ
けが田虫に悩まされ、股は真っ赤になり、治療にサル
チル酸液をつけるが飛び上がるほどしみる。

上海呉淞港上陸は八月二日、以後揚子江を遡り、八月二十四日紫金嶺着、歩兵第六十五連隊（第十三師団一鏡兵団）第一大隊本部に転属しました。教育は六カ月間、その間に一期の検閲を受け、その後荊州へ移動、城は東西南北に西の城門のある、古い都市でした。

連隊本部は沙市で、中支軍の第一線（揚子江）。第十三師団は第十一軍の基幹部隊（第三師団と共に）の作戦専門の師団でした。その後、大隊は郝穴、斛湖堤に連隊本部、開口には昭和十八年五月十日着。討伐のため慈利にも行きましたが、足を悪くして入院、入室の上下番をやっていた常徳作戦には参加していません。十八年十二月十日、湖北省公安県斛湖堤着、第一線の警備です。

昭和十九年六月、湘桂作戦のため出發しましたが、衡陽作戦では敵の退路遮断をしました。衡陽陥落まではその周囲を警備、太鼓を叩くような砲撃戦、とにかく凄く、空中では日米両軍の飛行機が巴になって航空戦をやっていました。私は作戦発起から輜重大行李担当ではなく、軍医の当番をしていました。

来陽の飛行場には三日ぐらいいて、山の中を通り、陥落した衡陽、零陵（飛行場）、祀陽（飛行場）と南南西へと作戦を続け、兵団は敵軍を追撃して行きました。ところが、湘江には赤痢菌、コレラ菌などの伝染病菌が流れていました。

暑いので湘江で水泳したり、水を飲んだりすると、赤痢やコレラに感染する。ところが、これら病気を治療する薬が無い。軍医さんは帰ってから「申し訳なかつた」と言っていました。補給は医薬品だけではない。被服も軍靴もボロボロ、だから駐屯中は中国人の服を着ていて、出發するときはぼろの軍服を着る。とにかく補給なしかつた。食料もないから徴発、青田刈りをしてしのいだのです。

柳州攻略戦の途中、全県あたりでは空爆のため中国軍らの死骸が沢山ありました。日本軍は死体を収容したり埋葬したりしている。

安仁での戦闘はひどかつたという。負け戦だつたという人もいるが私は本部だつたので参加しなかつた。私の中隊は相当やられた。私は軍医さんの当番だつた

ので助かっているが、戦友は大部死んでいる。

桂林は他の部隊（第三十四、第四十師団他）が攻撃占領しているが、中国の南画にあるような岩山、石筍のような山が（群馬県の妙義山のような）林立していて、岩窟が天然の要塞、トーチカとなっていて、中国屈指の軍用飛行場があるので、この占領は湘桂作戦の目的でもありました。

私たち師団は、第三師団などとともに、もう一つの大飛行場柳州の攻略が目的でした。我が連隊は柳州の先の柳城まで進んでいて、柳城で柳州の攻略を聞きましたが、そこに二泊ぐらいたった記憶があります。しかし、もう十一月も過ぎ、特に広西省は、部落々々が自警していて、他の部族の進入を許さないモンロー主義の地方。したがって湖南省のように食料の調達は困難であるし、戦線が延びているため、後方よりの補給もほとんどありません。私たちは食料がなくて犬を殺して食べました。

日本軍が破竹の進撃をするので、宜山、金城江、河池に着くまでに、住民の布帛や衣料などが道路に捨て

てあり、それを跨いで歩いた。日本軍の進撃を防ぐのは中国の地上軍ではなく、米軍の飛行機でした。宜山あたりでは双胴のP38にやられた。爆弾二発積んで投下した後、今度は戦闘機として銃撃をする。

大隊長は敵情偵察中に狙撃されました。私が川を渡ったとき、担架が運ばれ、上に掛けた白い毛布が血で真っ赤でしたが、薬がなくて戦死されたのです。豪放な人でしたので今でも思い出します。私は戦後、毎晩のように夢を見てうなされて、妻に起こされました。

連隊は貴州省に向かつて進撃を重ね、南丹へは明かというちに着いたが、馱馬部隊はP38、三、四機の反復攻撃を受けドンドンやられている。木も何も無い、遮蔽物は無い。私たち徒歩部隊は道路の脇の木の下に隠れたが馱馬は隠れられずやられてしまいました。

我が師団の一部は貴州省の独山に突入し、目的を達成したので、我が連隊も、南丹付近から反転して河池で警備し、軍の西方の第一線陣地を構成していました。飯盒炊さんをしたくても水がない。河原の砂を深く掘ったら水が出て来る。広西省も南支那なので暑くなっ

ていました。五月ころから木の芽が出て若葉になってきました。日本なら六月の気候でしょう。

そのころ私は歩兵第六十五連隊本部勤務となり将校当番をしていました。第一線の中隊にいなかったのが死ななかつたのでしょうか。

【解 説】

歩兵第六十五連隊長（服部卓四郎大佐）の日記を要約すれば次のとおり。

歩兵第六十五連隊の警備した河池地区には、十二月中旬早くも追尾して来た重慶軍が、前面に現出を始めていた。「十二月十七日軽機関八ヲ有スル四〇五〇〇ノ敵初メテ河池前面ニ現出ス」と師団に報告があった。逐次に増加中の重慶軍は、第四六軍第一七五師を主とし、同じく新編第一九師と第三七軍第九五師が、これに続いていた。河池は歩兵第六十五連隊第一大隊が警備していたが、二十日から河池南西側の第四中隊正面には約一、〇〇〇の重慶軍が来襲した。戦闘指導に当った第一大隊長田畑清久大尉は戦死し（戦死後少佐に

進級）、第四中隊長根本健児中尉は戦死し、代わった相良清吉中尉もまた重傷を負う等多数の戦死傷者を出した。大隊は二十七日ついにこの重慶軍を撃退したが、公路周辺の岷々たる岩山の頂上を、点々と占領するに過ぎない同地区警備は、連隊長の苦心するところであつた。

第二大隊は、全城江地区を警備した。同地は湘桂鉄道および公路の合する要点で、柳桂の守備に任じた中国軍の兵站基地であり、食糧、兵器、被服、装備品等多数を倉庫と共に押収したのであつた。したがって中国軍の金城江奪回の企図は軽視できぬものがあり、河池地区に來襲した重慶軍と歩調を合わせて、北方より小兵力の來襲がしきりとつづいていた。

第三大隊は公路の南方で、河池南東二〇キロ五墟に配備された。五墟は、東欄（河池南西六〇キロ）、都安（宜山南西百キロ）に通ずる経路を扼し、付近一帯はやはり岩山地帯であるが、連隊警備地区の南方の要点であつた。東欄には重慶軍第四六軍軍部が進出してきただので、河池西方及び南西方からの反攻を指導したの

であるが、河池への来襲に伴い第三大隊の西方拠点たる第十、第十一中隊正面にも重慶軍は来襲した。ために第十中隊長満山敬三中尉以下多数の戦死傷を生ずる状況であった。

我が連隊は反転し、柳州、桂林と進攻のときの経路とは逆な道を撤退してきました。途中、一般の家の中国人に「お前たち負けたのだ」と、宿泊している家から追い出された。

軍旗は撤退中の全県（広西省北端の町）の北方で奉焼しました。武装解除は、江西省の揚子江の南に接している番陽湖畔の湖口という港の南、周田裡で集結して行われた。湖口にいたときは、中国軍の使役として、手製の草鞋を履いて、元日本軍の食糧の運搬を番陽湖の側からさせられ複雑な思いをしました。

集結地での生活は、わずかばかりの食糧を、元日本軍の糧秣の中から配給を受けるがもちろん足りない。そのため近郊農家の手伝い、田植えなどをして食糧をもらって生活をしました。また、伐採班は朝飼（あさ

げー朝食）の前に山へ行き、長い木を担いで来て、斧で割り薪にして、釜で食物を炊いて食べました。水は飯盒十個くらい持って民家の井戸にくみに行くという、仮の生活をしていました。

いよいよ上海集結ということになり、南京まで揚子江を船で下る。南京では、穴を掘った便所で、用をたしていると中国人が、しなしなとした青竹で尻を叩く。民衆の報復か侮辱か、負けた者の悲哀でした。上海までは無蓋貨車であるので停車中物を奪られたり、機関手に物をやらねば発車をしない。途中で停車して進まない。そのため、隊長の宮川中尉は、毛布や時計を機関手に与えて動かしてもらおう。汽車は中国では火車であり、燃料は薪でありました。

上海では一週間ぐらい天幕生活、食料は配給だが少ない。内地へ帰ればと皆我慢をしていました。私は一部の医務室勤務だったので幾分待遇は良かったような気がしました。階級章は皆取ってしまったので、部隊、中隊は皆一緒ですから、軍紀風紀は厳しく守られていました。負けたからといっても、将校、下士官、

先輩、後輩の別はきちんとしていました。

上海乗船は、昭和二十一年六月十三日で、その日のうちに出帆と記憶しています。九州、長崎県の佐世保着、検便を半分くらいの人にしましたが、この部隊は患者なしで大丈夫となり、途中で止め下船しました。引揚げの在留邦人は婦人、子供がいたので検査を続けていました。

部隊は復員、解散となり、臨時の復員列車で、福島郡山駅に着いたのは夜でした。お陰で家も家族も大丈夫、生還を喜び合うことができましたが、私より後に出征した兄は、昭和十八年中支湖南省で戦死をしていました。

私の部隊は支那派遣軍の戦闘専門の第一線部隊のこゝととて、沢山の戦没者を出しています。特に我々の年次の兵隊は、大東亜戦の主力の兵隊でしたから犠牲は多いのです。私は、時々申しましたように将校や軍医の伝令、本部医務室勤務などのため幸運にも、満四年半の軍務を完うし生還できました。

第十一軍直通信隊

湘桂作戦 陰の戦歴

広島県 松木 正

私は大正十三年五月三十日、広島県賀茂郡大和町に生を受け、事情あつて父母は私が三歳のとき、協議離婚し、祖父母に育てられて成長した姉と私でした。家は農家で、九六アールの水田と二アールの畑で生計は楽ではなかったようです。しかも貧しい中での中学校（旧制）進学は、祖父母に相当の負担をかけ、遊ぶ余裕のない日々で農業、家事の手伝いをさせられたものです。

昭和十二年、中国との紛争に始まる戦争態勢は急を告げ、平和な農村にも若者の現役入営、召集令状による出征兵士の見送り、また戦死者の公報とともに遺骨を迎える村人の表情を見て子供心にも物悲しさを覚えておりました。